

「フレンドシップ事業」の充実を願って

青森県立梵珠少年自然の家
所長 尾崎 光蔵

近年、子どもたちを取り巻く社会や生活環境が大きく変化し、生活体験や社会体験、自然体験の場や機会が極めて少なくなっており、このことから、対人関係の不慣れや、精神的なたくましさ・忍耐力の不足などが指摘されております。

子どもたちが、美しいものを美しいと感動する心や、他人の痛みや辛さを、我がものとして受けとめる心など、今日問題となっている「子どもの豊かな心」は、教室内の学習だけではなく、家族のふれあい、遊びや仲間づくり、自然体験や科学体験、スポーツや芸術・文化活動など、日々の生活の中で積み重ねられる多くの体験や活動を通して育まれていきます。

野外活動などの自然体験活動と集団生活の場を提供している自然の家は、「豊かな心」を育むきっかけをつくる場として、また「生きる力」を育む場として、その果たす役割は大変大きいものがあると考えております。

そういうことから、梵珠少年自然の家では、四季折々の姿を見せる自然の中で思いっきり身体を

動かし、人と人との交流の素晴らしさを知り、心に残る思い出をたくさん作ってもらえるよう、職員一丸となって日々努力しているところであります。

四年目となる「フレンドシップ事業」において、将来教員を目指す弘前大学教育学部の学生の諸君が初めて当自然の家を利用され、親睦レクリエーションに始まり、野外活動として暗闇ビンゴとアドベンチャービンゴを、そして創作活動としてチャカボコケン玉づくりを行いました。

教科書の教材から離れた二日間でしたが、子どもたちの世界に立ち返り、大学の講義では味わえない、また学生生活では経験できないことを学び、みずみずしい感性を培いました。そして、自然の家で得たこれらの体験が子ども会や小中高校生との交流活動（ふれあい）に大いに役立ったと聞いて、非常にうれしく思っております。

私ども自然の家では、活動プログラムや主催事業を企画する際、常に子どもたちが自分達で考え、自らかかわることができるようなプログラムになっているかどうか、プログラムに「ゆとり」

があり、子どもたちの試行錯誤を促すような配慮がさなれているかどうか、異年齢の子どもたちが切磋琢磨できるようなプログラムになっているかどうか、について検討を加え、安全面についても万全な体制を確保することにしています。このことは平成14年4月から実施される新しい教育課程の考え方とも共通するのではないかと考えております。

これからも宿泊機能や教育機能を持っている当自然の家での体験活動を取り入れながら、「フレンドシップ事業」がますます充実されることを願ってやみません。